●小学校での実践の限界

『私の漢字教室』の出版により、石井式漢字教育は全国に知れわたることになりました。ところが、文部省の指導要領を無視した教育ということで、実際に「やってみよう」という教師はほとんど現れませんでした。

その中で新潟県亀山町の袋津小学校、続いて熱海市の桃山小学校、富上市の須津小学校、少したって弘前市の舩沢小学校が、全校挙げて実践してくれました。しかし、その著しい成果にもかかわらず、実践の中心であった校長が変わると方針は変更され、いずれも五年間くらいの実践で、根付かぬまま終わってしまいました。

唯一の例外は、島根県における実践でした。昭和 51 年度、斐川町の出東小学校ではじめられた石井式は、稲田和夫校長を中心に全校挙げて実践され、まず 56 年度まで五年間続けられました。そして、57 年度には校長以下全職員がすっかり入れ換わり、初期の職員はひとりもいなくなっていましたが、研究、実践は中間幸夫校長以下全職員に引き継がれていよいよ充実していったのです。

また、昭和 59 年度には、元校長の稲田先生を会長とし『石井勲先生を囲む会』が結成され、この会の主催で毎年夏休み中に、石井式教育研究会が開催されるようになり、すでに 16 回に及んでいます。受講者の数は延べにすれば数千人に及ぶでしょう。

しかし、これは本当にまれなケースです。特に悲惨だったのが、私の考えに共感してくれた教師が個人で実践を試みた場合です。クラスでの成果が上がれば上がるほど、周囲からの風当たりが強くなり、中止せざるを得なくなります。そればかりか、ときには精神的ストレスから体をこわしたり、退職を余儀なくされるといった、痛ましい結果さえ招きました。

そういう悲劇を見続けているうちに、私は「小学校の教育現場では、石井式はとても普及できない。もう著述で訴えていくしかない」と考えるようになりました。同時に、志の高い立派な教師をこれ以上不幸な目に遭わせるのも耐えがたいことでした。

そこで、私は 14 年間やってきた小学校教育の現場から身を引く決意をしたのです。昭和 42 年 3 月、私が 47 歳のときでした。